

ライフ
ストーリー

しゅおんさん
(2019年3月理工学部卒業)

レズビアンとして日本に生きる私が思うこと

1. はじめに

みなさん、はじめまして。理工学部生命医化学科 2019 年卒のしゅおんです。在学中は三田キャンパスで数理生物学を学び、現在は IT 系の企業で SE をしています。

2. セクシュアリティを自覚したきっかけ

初めて誰かに興味を持ったのは 5 歳の時で、テレビのドラマ「ナースのお仕事」に出演していた松下由樹さんでした。

小学校に上がってからは宝塚歌劇団出身の天海祐希さんを好きになって、出演しているドラマや映画は欠かさずにみていました。その後も好きになるのは所謂かっこいい年上の女性ばかり。

現実の世界で誰かを好きになったことはありませんでしたが、中学生の時には女性を好きになると自覚していましたし、オープンにしていました。母にも「あなたが別にレズでもいいよ」と謎の許しをもらったのもこの頃だったと思います。

女性同士の恋愛について描かれた映画やドラマを母にレンタルしてもらったり、小説を買ってもらっていたので、男性アイドルに熱を上げている妹と比べて、明らかに様子がおかしいとは思っていたのだと思います。年上の女性が好きだったからなのか、中高女子校だったにも関わらず同級生に恋をするというイベントもなく、平穩に日々を過ごしていました。レズビアンという自覚は早かったものの実際に恋愛をするのはずっと先になります。

3. 大学生活について

入学式後のオリエンテーションでサークル紹介のパンフレットが配布されました。そこには LGBT サークル CASSIS の紹介もありました。入学前からサークルの存在は知っていて、実際にホームページからコンタクトを取ったのですが、返事がなかったため諦めていました。

すぐにパンフレットに記載されていた連絡先にメールを送ると、数日後にお花見をするので、良かったら来ませんかとのことでした。勇気を出し

て参加すると返事をしました。かなり人見知りで人と話すのが苦手だった私にとって、これは私の大学生活で最も賢い決断だったかもしれません。お花見は他大学の LGBT サークルのメンバーも複数いて、セクシュアルマイノリティの人しかいない場というのは初めて(誰もセクシュアリティをオープンにしてないだけで実際にはあったかも)だったので、居心地の良さと安心感を覚えました。そこからは積極的にサークルのイベントに参加するようになりました。毎週のランチ会、お花見、合宿、今でもすごく思い出に残っているイベントばかりです。

高校生までのひどい人見知りが改善されて、イベントではじめてのサークルメンバーに会っても自然と会話できるようになり、苦手だったことがどんどん楽しくなりました。いろんなことに誘ってくれた同じキャンパスの先輩の存在が大きかったと思います。

大学 3 回生からはサークルの幹事としてイベントを企画する立場になりました。他大学のセクマイサークルのメンバーとみんなが楽しめるイベントについて考えるのはすごく楽しかったです。大学を卒業してからも同じサークルだったメンバーとは定期的に会っています。

セクマイサークルに所属してからイベントを通じて色々な価値観に触れたり、幹事として自分で積極的に行動できるようになったりしたことで、自分にも自信を持てるようになりました。なので就職活動でよく聞かれる、「どんなサークルに入っていたのか?」という質問には迷わず LGBT サークルと答えました。そこで LGBT とは、セクシュアルマイノリティとは何かについてそこから説明しないといけない現実と向き合うことになります。説明したところ変な空気になるのがオチでした。初めてそこで自分がレズビアンであることは隠した方がいいのではないかと感じました。

大学を卒業するまではセクシュアリティを隠していませんでしたが、社会人になってからは会社の人には特定の人以外にカミングアウトをしていません。

4. 恋愛について

大学生になって同性同士のカップルと知り合う機会が増えました。私自身も恋人というものが欲しくなり、出会いを探しはじめます。何人かとお付き合いしましたが、決まって1ヶ月と少ししか続きませんでした。

何人かとお付き合いしましたが、長く続かなかった理由は私がデミセクシュアルであることと、一番大切にしている価値観を共有できなかったからだと思います。まずデミセクシュアルとは精神的なつながりを感じる相手にだけ性的欲求を感じるセクシュアリティです。私がデミセクシュアルであると自認するまでには少し時間がかかりました。数回デートして恋人ができてセックスをしたいとは一度も思いませんでした。大学を卒業してからもそのことについて悩んでいました。他者に対して性的欲求を抱かないアセクシュアルではないかと思っていました。

24歳の頃、中高の同級生でCASSISにも所属していた友達がインターネットを通じて出会った相手とお茶をしているとのことで、暇だった私はもう1人の友人と一緒に合流しました。そこで出会ったのが今の恋人です。初めて会った時から社会に対する不満や仕事についてなど色々なことを数時間話して、とても楽しかったのを覚えています。そのあと2人でご飯を食べに行ったり、映画をみたりしてお互いのことを少しずつ知っていくようになりました。

私の一番大切にしている価値観はあらゆる差別に対して不寛容であることです。彼女とは働いている上で感じる女性差別や、人種差別、私がおかしいと思うことに対して意見を言っても嫌な顔もされず、お互いに意見を言うことができました。私は人前で手を繋いでも平気なタイプですが、恋人はクローゼットだったのでそれができなかったり、恋人は私たちがつき合っていることを友達には言わないけど、以前男性とつき合っていた頃は友達に紹介していた話を聞いて傷ついたり…。恋人が悪いわけではないとわかりつつも、付き合っていることを隠さないといけないことが精神的に辛いこともありました。でも、そういう場合でもお互いの考えていること、感じていることを話し合うことができたので、どんな問題でも解決できました。そうして時間をかけて少しずつ精神的に強いつながりを感じるよ

うになりました。そこでデミセクシュアルの話に戻るのですが、私は恋人にしか性的欲求を感じないですし、恋人に対して性的欲求を感じるようになったのも付き合ってから数ヶ月経ち、お互いの気持ちが通じるようになってからでした。そういうことで、今のところ私はデミセクシュアルではないかと思っています。今は恋人と一緒に住んでいるのですが、毎日一緒にご飯を食べて、寝ることができるのがすごく幸せです。

5. 最近よく思うことについて

一つ前の章で恋人と一緒に住んでいて毎日幸せとは書いたのですが、何も問題がないかと言えばそうではありません。今は恋人の借上げ社宅に住んでますが、2人で家を探すとなった時どうなるのか、一緒に住める家はあるのか？という問題にぶち当たります。今の日本では一緒に家を借りるのも難しいのが現実です。実際にある賃貸住宅の検索サイトの検索条件に「LGBTフレンドリー」を選択すると、数百件あった物件が0になりました。LGBTフレンドリーじゃないって一体どういうことなのでしょう。考えるのもしんどくなったので、そっと賃貸住宅の検索サイトを閉じました。

今まで何度かデートをした相手に「あなたはフェミニストですか？」と聞いたことがあります。大抵の場合、「フェミニストではないけど、女性差別はダメだと思う」、「女性差別はダメだけど、男性差別もダメだと思う」と返ってきます。日本では人権問題について何か意見を言うことや、自分の権利を主張することに対してネガティブな雰囲気があるようです。

同性婚を法制化して欲しいというと、「伝統的な家族の形が〜」、「少子化が進むから〜」など非合理的な意見が飛び交います。同性婚ができるようになったからといって誰も困らないし、同性婚をしたい人がハッピーになるだけです。

選択的夫婦別姓もそうです。選択できるんだから夫婦別姓にしたい人はすればいいし、したくない人はしなればいいだけ。関係ない人には何の影響もないのに、どうしてこんなに進まないのか不思議です。私が中学生の頃はあと10年もすれば同性婚できると思っていました。東京都

の渋谷区と世田谷区でパートナーシップが2015年に施行された時には同性婚はあと2、3年だなども…。

「パートナーシップもあるし、2人が仲良いならそれで十分でしょ」というような意見を異性愛者の方からよく聞きますが、仲良いだけで十分なら異性愛者はどうして結婚するのでしょうか。もちろんそこをつっこみたいのはぐっと我慢します……。自治体が同性カップルの存在を認める(そもそも私たちは国に”認めて”もらう必要は無いのですが)制度ができたことは良いことです。今までは存在すら消されていたのですから。

ただそこに法律の効力は反映されません。携帯の家族割引が受けやすい、病院の面会で家族扱いされやすいなど、確約事項では無く企業や担当者の判断材料となるだけです。この章の冒頭のように恋人と賃貸を借りる時に有利には働いても、会社の福利厚生にある世帯家賃補助や配偶者控除は受けられません。パートナーシップ制度導入であたかも同等の権利を与えたように見せかけ、同性婚を先延ばしにしているのが現状です。

結婚するかしないかは個人の選択であって、私は同性婚をしたいから同性婚が認められるべきだと考えているわけではありません。同性愛者にも結婚するかしないか選択できるべきだからです。

6. マイノリティ性について

私は性自認が女性であり、セクシュアルマイノリティであるという2つのマイノリティ性があります。

また、私はフェミニストです。女性性による不平等を寛容せず、平等の機会と権利を主張する行為がフェミニズムの一つだと考えています。しかし、最近フェミニストのトランス差別者の発言を目にすることが多いです。私はトランス差別に反対していますし、そもそもトランスを差別する人はフェミニストでは無いとも思います。セクシュアルマイノリティと一括りにされる集まりの中でも、トランスジェンダーはより少数派です。私は当事者では無いので実際の大変さを語ることは出来ません。それでも、永遠と繰り返されるトイレの利用方法やスポーツ競技への参加といった話題で批判

されているのを知っています。容姿を基準にした非常に身勝手に主観的な誹謗中傷も見受けられます。

マイノリティだから他のマイノリティの気持ちを全てわかるだろう、なんてことは思いません。私自身も想像しきれないことばかりです。当事者には痛みはわかりませんし、当事者だって様々です。ただ、差別を受け被害を被った経験がある人たちが意図的に誰かを排除する行為は理解することができません。「トランスジェンダーの女性は女性」、他人の性自認に誰も口を出すな。ただそれだけです。

また結果的にマイノリティに属していたことによりあらゆる問題への意識が生まれたと思います。例えば自分が日本で生まれ育ったシスジェンダー男性でヘテロセクシュアル(つまり私の属している真反対のマジョリティ側)だったとしたら？正直なところ全く違う価値観を持っていたかもしれません。もしかすると社会生活における差別に気づくこともなかったかもしれません。

これは自分がセクシュアルマイノリティで良かったと言っているわけでは無いです。ただ自分の偏見や差別意識で、誰かを傷つけたり排除する行為は絶対に許されません。この点では、アンテナが広がり学べた点は多いと思います。

6.まとめ

男社会での生きづらさを感じ、政治家の差別発言を聞いて嫌になることは日常茶飯事です。まだ性差による賃金差がある仕事はありますが、それでも今の私は男性と同じ給与体系で働いています。パートナーシップの不十分さに反論し、政治への不満を胸に選挙で投票することもできます。当たり前のように感じますが、これは全て過去の誰かが戦い勝ち取ってきた結果です。

次は私の番です。数年後、いや数十年後になるかもしれないけれど選択的夫婦別姓や、同性婚を実現させるのです。私は小さくても自分にできる戦い方をします。投票に行く。政治への意見や権利を主張する。あらゆる差別には大きな声でNOを突きつける。

4 章であらゆる差別に対して不寛容であることが私の最も大切にして
いる価値観だと述べました。それでも過去を振り返ると差別的な発言を
していた自分もいました。今でさえも自分の中にあらゆる差別意識は存
在していると思います。そんなつもりはなかった、悪い意味は無い、は言
い訳にはなりません。自分にも差別意識があると受け入れ、指摘されたと
きは真摯に向き合い学んで行く姿勢を忘れないようにしたいです。

ここまで読んでくれた皆さんありがとうございました。ゆっくり少しずつ
でも良いです。一緒に未来の世代のためにできることをしてみませんか。